

社会人基礎力は、 もっと幅広い年齢の教育で活用できる！

高校のキャリア教育に社会人基礎力を導入

私達は、平成17年に経済産業省の「地域自律・民間活用型キャリア教育プロジェクト」のモデル事業として、札幌市の公立学校で、プロジェクト型をベースとした小中高生向けのキャリア教育プログラム「Sapporo 夢探究プロジェクト」を始めました。ここでは、当初はチャレンジ精神や態度、意欲などの向上を目標にしていました。しかし、平成18年に「社会人基礎力」の中間報告が出てきたときに、「札幌の事業体はほとんどが第三次産業だから、本当に必要なのは『社会人基礎力』的なところだね」ということになり、プログラムの目標に「社会人基礎力」とビジネスマナー的要素を取り入れることにしました。

札幌市立の高校では、2年生（学校によっては1年生）全員が1日ずつ、札幌市全域でさまざまな職場体験学習を行っています。ただ、「高校の職場体験は、中学校とは差別化したい」という教育委員会の要望があったので、高校生には、5〜6人でチームを作らせて1日で完結するプロジェクトを作りました。そのプロジェクトを回す中に、「社会人基礎力」を取り入れたので。

高校生の職場体験は、中学生のように仕事のお手伝いをするだけでは面白くありません。しかし、高校生が興味を持つような仕事は、個人情報保護法の問題などの制約があり、1日で体験することはできません。そこで、丸一日かけて、新聞作りやTVCMの絵コンテ作りに挑戦するプロジェクトを考案しました。例えば新聞作りなら、動物園に職場体験に行く代わりに、動物園の園長の取材をしてその内容を記事にまとめ、その日のうちに紙面を作るのです。このプログラムは、札幌市教育委員会から好評を得たため、経済産業省の事業が終了した後も市立高校の進路探求学習に組み込まれています。協力企業もだんだん増えて、現在は各学校がそれぞれ行っています。高校で、生徒全員がこういう体験をしているという地域は、全国的にも珍しいと思います。

高校生には、「3つの力」で説明する

プログラム当日の朝礼では、「社会人基礎力」について「社会で求められる3つの力がある」ということから説明します。まず、社会では成功の反対は失敗じゃない。何もしないことが失敗だ、ということをお話します。「成功の方法が1つしかない」とすれば、「コンビニにはセブニーレブンしかないかもしれない。ローソンなど他の「コンビニ」もあるのは、試行錯誤しながら、少

しずつ何か違うことをしているから、それはチャレンジしてみないとわからない。社会では失敗してもいいからチャレンジすることが大切だ。今日は1日失敗してもOKだから、勇気を持って一歩前に踏み出そう」という、「前に踏み出す力」が一つ。

次に、「仕事は自分一人では完結しないので、今日はチームの皆と話をしよう。打ち合わせで沈黙しているのは悪だ。必ず発言しよう。その中で決まったことには必ず従おう」と「チームで働く力」に関する話をして、最後に「僕はこう説明しているけど、もしかしたらこれは違うかもしれない。それは今日の授業の中だけで気付くことではないが、『変だなあ』と思ったことがあったら、ぜひ考えてみたり調べてみたりしてください。そのことが次に改善という形につながってくる」という「考え抜く力」に関する話をします。

パワーポイントはわざと使いません。配布資料はありますが、「考え抜く力とは」など、「社会人基礎力」の説明が書かれているだけのものです。「12の能力要素」については話さず、最後にアンケートや感想文を書いてもらうときも、「3つの力」だけに絞っています。

新人教員の研修に社会人基礎力を導入

私達は、札幌市立の小中高校の新人教員のキャリアガイダンス研修も毎年行っています。この研修は、キャリア教育の意義の普及と、先生方がホームルームや「総合的学習の時間」でキャリア教育を行うときのヒントを提供することが目的で、4時間のカリキュラムの中の1コマ30分くらいを、ワークシートを使って進めます。

このワークシートは「社会人基礎力」の12の項目が書いてある簡単なもので、それぞれの力が身に付くと思われる学校の場面を書いてもらいます。5〜6人ずつのグループを作り、まずは一人で書くのですが、なかなか書けません。その後グループで見比べて、A3用紙にどんどん書いて共有します。そこで「こういう場面もあるのか」という気付きがある。最後に全グループの発表をするので、さらに新しい気付きがある。最初、先生方には想像がつかないらしく、例えば「考え抜く力」のところに自分の教科が入らない。私達は、出てきた意見は全て肯定しながらフィードバックしていき、最後に「でも何か足りませんよ。自分の教科の中でもこれはできるでしょう？」例えば『ストレスコントロール力』も勉強していく上で必要ですよ」と話すと、納得されます。そして「自分達の教えていることが、社会とどうつながっているのか、自分達の言葉で子ども達にちゃんと話せるようになってください」というメッセージを送るのです。

むしろ小中学校の教育目標は、社会人基礎力にとっても近い

学校の教員研修などで、「どんな人材が求められているか」という講演をよく頼まれます。「社会人基礎力」という言葉がなかったときには、例えば「コミュニケーション力」について、「いろんな調査の統計ではこう出ています」という話をして、先生方はそれが腑に落ちていないような気がしていました。私達がキャリア教育のプログラムを作るときは、必ずその学校の教育目標を聞きます。学校の特別活動やいろいろな行事活動は、教育目標と照らし合わせているような活動を組み合わせるのですが、キャリア教育として「社会で求められる力」を入れなければならなくなったとき、具体的にどうすればいいのかわからない、という学校がけっこう

ありました。

ところが、「社会人基礎力」と照らし合わせてみると、教育目標はわりあい普遍的なことがうたわれているので、両者は相通じるところがあるのです。そこで、教育目標と「社会人基礎力」の合うところをつなぎ合わせたら、先生が納得してくださることが多くなったので、その部分を進んで話すようになりました。例えば、小中学校の教育目標によくある「誰とでも仲よくできる子」というのは、まさに「チームで働く力」です。社会で求められる力と同じですね、という形で「社会人基礎力」を紹介します。また、実際にどのような職種で、どんな力が求められているかということも経済産業省のホームページで見られるので、そういったところを示しながら説明します。実は、「3つの力」は、小中学校の教育目標とほとんどかぶっているのですよ。

キャリア教育の「4領域8能力」と「社会人基礎力」の違い

職業観・勤労観というのは価値観ですよ。価値観は人それぞれ違います。「皆さんの好きな色のTシャツを買ってあげます。何色が好きですか?」と聞かれたら、すぐ答えられますよね。これは、色彩に関して、好きな色とか似合う色という価値観が皆さんの中にあるから、すぐ答えられるわけです。では、「今の仕事以外で好きな仕事をさせてあげますから、本当にやりたい仕事は何か言ってください」と聞かれると、すぐに答えられる人もいますが、たいていは考え込みます。そのことに対する価値観が定まっていないと、結論を下すことは難しいですよ。だから、子どもにも仕事を選ぶために必要な価値観は、言ってみても備わるものではないので、体験させる必要があると考えています。

文部科学省でいう「4領域8能力」※(p550参照)は、職業観・勤労観を育むためのプログラムの例で、「職業観・勤労観」という価値観を育むために必要と思われる体験を子ども達が行うために必要な能力の例として、「4領域8能力を発達させましょう」という話で、それ自体が目的ではありません。その能力を使える場を提供するのがキャリア教育で、例えば職業体験で人間関係形成能力と将来設計能力を使い、働くオトナとコミュニケーションを取りながら、この仕事の役割・意義などを理解する、というように使うことで、職業観や勤労観が育まれていくというものです。それに対して、「社会人基礎力」は社会で求められている力ですから「キャリア教育で目指すもの」になります。言い換えれば、「プログラムを体験するときに、どんな力を伸ばしたいか」というのが「社会人基礎力」なのです。

これが「4領域8能力」と「社会人基礎力」の違いだと考えています。
※「キャリア発達に関わる諸能力」4領域8能力(国立教育政策研究所が提言)

●三上 力氏

キャリアバンク株式会社 雇用創出事業部教育関連チーム 課長

新卒で入社した損害保険会社が経営破綻。そのときの体験からキャリア・コンサルタントを志す。北海道高校生就職支援プロジェクトに参加後、キャリアバンク株式会社に入社。経済産業省/地域自律・民間活用型キャリア教育プロジェクトなど、小学生から大学生を対象としたキャリア教育に関わる各種事業に携わっている。